

2021年7月

課題本『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』

大島真寿美/著 文藝春秋 2019年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

『渦』という文字よりも、『妹背山婦女庭訓 魂結び』と言う文字をすらすらと読んで、笑いがこみ上げてきました。

江戸期の文芸として出てくる『伽羅先代萩(めいぼくせんはいはぎ)』や『傾城△△△』(けいせい△△△)『神明恵和合取組』(かみのめぐみわごうのとりくみ)などの漢字で書かれた作品名をずらりと並べ、小手調べだとその読み方をテストされた昔の記憶があるのです。さっぱり読めません。みんなの珍妙な読みで、大笑いが続きました。

おかげで、以来このての文字を見ると、懐かしい人に会ったような気になります。

とはいうものの、今回の作品は、馴染みの薄い浄瑠璃や歌舞伎の世界のことで、読み終わって眺めてみると、近松半二という浄瑠璃の詞章作者の一代記でした。

文章は、セリフの量が多く、それが関西弁です。平仮名を丁寧に読む必要があり、聞き覚えのあるアクセントで、自分に読み語りをするような読み方ですから、いつもより少し時間がかかりました。〈頼みによこおへんから〉など、一文字ずつ拾うような読みです。

浄瑠璃と歌舞伎の違いが、今回あらためて整理できました。

歌舞伎は何回か上演を見る機会がありましたが、人形浄瑠璃は、ほんの数回しか見たことがあります。演者の名前も、歌舞伎の方がよくわかります。それでも、浄瑠璃の演目を見ると、見知ったように感じるのは、もともと浄瑠璃の為に書かれたものでも、翻案されて、歌舞伎で演じられているからだと今回あらためて認識したことでした。

作品に込められた情も、役者が発声し身体で演じる歌舞伎と、それを三味線と共に太夫が語り、人形遣いの人形が表現するのとでは、大きな違いになります。

客としてみるときの集中力は、人形を見ている時の方が小さい濃い円になっているように思いました。人の身体動作や肉体の限界を、人形は越えられるのかもしれませんが、いつでもつやつやとした美しい人形の肌は衰えることはありません。

ただし、見る側の想像力、洞察力に対する要求は、人形浄瑠璃の方が高いと思います。客が、その要求に応えるのが面倒になると、歌舞伎の方が興行収益はあげられるでしょう。浄瑠璃に比べて歌舞伎が今も華やかに続いているのは、役者の人気の内容を手助けし易いというものもあるのではないかと思います。

浄瑠璃にしても歌舞伎にしても、江戸時代の台本作者は、近松門左衛門の名をあげ、その後、鶴屋南北、河竹黙阿弥の名前を加えればそれで良いくらいの知識でした。

ところが数年前、並木宗助(宗輔)という竹本座(豊竹座に居たことも)の作者が、30 才くらいまで、三原市の臨濟宗成就寺の修行僧であったと知りました。

還俗して大阪に住んだその人は、並木千柳という名前です。今回の作品にも登場しますので、目にした途端、「あらっ、あの人」と浮き立ちました。

『菅原伝授手習鑑』や『仮名手本忠臣蔵』などを手がけたのは、三原でお坊さんだった人だと思えば、何となく近くなろうというものです。

『仮名手本中心蔵』は、浅野と吉良の争いを、時代を移して、塩谷判官の刃傷、大星由良之助の敵討ちにしてあります。吉良のモデルになった高師直は足利尊氏の家来。たどっていくと出会う人が広がります。近松半二という聞いたことはあるけれどよく知らない人が、私には並木宗輔への親しみから発して、生き活きと感じられるのですから、興味の湧きようはいいかげんなものです。

近松半二の魂のお師匠さんは、硯に想いを込めて残してくれた近松門左衛門。近松門左衛門が吹き込んだ魂は〈実にして虚にあらず 虚にして実にあらず この間に慰みがあるものなり〉という言葉であったと思います。

『渦』は、『妹背山婦女庭訓』という作品の成り立ちを見るようなものではありませんが、虚も実も夢も現実もいっしょくたに投げ込まれ、詞章作者達の頭と腕でかき回し、道頓堀という場を得て大きな渦巻きを現出させたもの。

中心に引き込む渦巻き、中心から無限に広がっていく渦巻き。遙か遠い世界も、自分の胸の内にあるという作者の高ぶりが伝わります。生も死も、あっちもこっちも三千世界も、いっしょくたにしてしまう「物語り手」の醍醐味が、作者の大島真寿美の筆に乗り移ったようです。

最終章は、活字の字体が、柔らかく少し小ぶりの文字も出てきます。それが『妹背山婦女庭訓』の「お三輪」なのです。当時、身近にあった三角関係の噂話が、半二の耳に入っていたのかもしれませんが。ロミオとジュリエットにも譬えられる男女より、叶わぬ男に懸想した「お三輪」の登場です。〈私は三輪と申します。〉〈身体を動かす人形遣い、言葉は太夫。しかし、私の性根だけは、ここにおります、〉と語り始める操浄瑠璃の登場人物は、そこに描かれる虚の世界で、窮屈な思いをして生きている現実の女の身代わりのように振る舞います。〈婦女庭訓は、男衆の都合です。〉観客の女に代わって語る「お三輪」ですが、その最期は、嫉妬に狂う女の生き血として、戦いの道具となりはてました。それでも愛する人の手柄になったと知り、喜んで死出の旅に就くのです。

この時の「お三輪」の心情を、〈愠気はあかんと戒められつづけたおなごは、むしろ、それやからこそ、すくわれるんです。悔しい思いがお三輪ともども成仏するんです。〉と文中に書かれています。

「お三輪」の悔しさは形を変えて現実の心のどこかにあると、大島真寿美は見るのでしょうか。婦女庭訓では咎められる行為を、舞台上の虚の世界で存分に味合わせしてくれるなら、最期は殺されても、それでも見物の娘達には良いのかもしれませんが。

「仁左さま」や「海老さま」にうっとりする現世に、江戸期は密接しています。その詞章作者が、“300年ほど前に、こないなように生きて書きましたんや”と、父母家族同僚達と共に、渦から舞台に現れたような気がしました。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 YA 】

この本で浄瑠璃作者、近松半二のことを知る。

近松門左衛門に傾倒し、その生涯を浄瑠璃に生きる。展開する舞台大阪道頓堀を始め、彼をとり巻く人物、又殊に女性たち、何かリズムがあって読むのに調子の良さを感じる。

父が門左衛門から貰ったという硯を譲り受け、浄瑠璃を継ぐ使命感もあったに違いないが、その才能を花開かせ、五十数年と言う短い半二の生涯とても面白く読んだ。

◆【 KT 】

浄瑠璃作家、近松半二の生涯。ストーリーにひかれ楽しみながら読めた。

「柝の音が聞こえた」の終りかたも気持ちよかった。

お三輪の存在についてもみんなの話を聞いて奥の深い事がわかった。

240年後のイヤホンガイドのくだりは微笑ましかった。

◆【 N2 】

はじめて浄瑠璃作者について知りました。面白かったです。人形はン百年も生き続け、あらゆる物事をみつめています。

なんと素晴らしい、なんとおそろしい！

『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』を読んで

◆【 YA 】

浄瑠璃は16世紀前半に琵琶法師による語りものとして始まったとされる。次第に人々の間に人気が出る。阿国歌舞伎の出現もあり、人形浄瑠璃として成長する。

このような中、17世紀後半から18世紀前半にかけて、人形浄瑠璃を代表する作者近松門左衛門が出現し、その芸能を確固たるものにする。人形遣い、三味線伴奏、義太夫語りで人形に命を与え、高い文学性や物語性を持って人々を魅了してゆく。

人々の生活の中にも起こるであろう事柄を演じる「世話物」は人気が高かったに違いない。

今回の課題本『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』は近松門左衛門に傾倒し、その生涯を浄瑠璃作者として終えた近松半二の半生である。「妹背山婦女庭訓」は合作と言えども近松半二の代表作となり、1771年大阪竹本座で初演され、拍手喝采となったとある。

儒学者の父に小さい頃から連れられて通った竹本座の影響が大きく、浄瑠璃の世界に迷わず入ったきっかけとなる。小さい頃の体験、経験が人生の生き方を後押しし、成就出来たのは本当に素晴らしく美しくもある。しかし人生は順風満帆とはゆかず、苦悩する半二もいたが、彼の周りの人々の存在が光っている。妻のお佐久をはじめ、歌舞伎作者の並木正三や竹本座の人々の影や回向の助け、必ず沢山の人の助けが必要と半二も確信している。竹本座

が大阪道頓堀にあったのも幸運かも知れない。大阪の人々の活気と人情味溢れる環境、半二の人生に勢いを与えている。

半二合作の代表作「妹背山婦女庭訓」は五段もので語られている。過去に起きた事柄を題材にした「時代物」だ。しかしどの演目も、妹山、背山という男女の愛情が入っている。真実と嘘、史実と空想等々、渾然一体となった物語は人形にも拘らず、人々は人形の中に苦悩や喜びを正に生きている人間と同じように感じたのだろう。

読書会では「お三輪」が話題になった。余りにもお三輪の語りが多過ぎると。鎌足の息子淡海と恋仲だったお三輪が恋敵の出現もあり、自分の本意でない死を迎える時、自分の流した血が淡海を救う事を知って喜んだ、と言ったのはお三輪の本心では無いと私は思う。この世の執着がお三輪のふっ切れない思いとなり語らせたに違いない。

半二の山あり谷ありの浄瑠璃への道のり、リズムよく面白く読んだが、一つを極めるにはそれなりの努力、苦勞が伴うと実感。

人形浄瑠璃と言えば門左衛門の「心中もの」、その門左衛門と肩を並べる半二の「妹背山婦女庭訓」、近松門左衛門に傾倒した半二の生涯は豊かで我が人生に悔い無しである。

◆【 R子 】

私は人形浄瑠璃も文楽も歌舞伎もみたことはありません。

本書を手にした時「私に読めるかな？」と一抹の不安がありました。

しかし大阪弁でポンポンとかけ合うやりとりで不安はなくなり、読み進めることが出来ました。

近松半二という人の生き方が書かれていましたが、それを探った大島真寿美さんの文楽愛と言うか、日本人が古来から持っているものを大切にし、引き継いでいこうとされている文学に努力の“たまもの”を感じました。

とても課題図書ではないと読めない本でしたので、出会えてうれしかったです。

◆【 TK 】

昔の映画、テレビであろう、浄瑠璃、歌舞伎の伝記だった。私にとっては、半二の深い感情が汲み取れず淡々と読んでしまった。時代物はどうも言葉の意味も把握できないのである。

しかし、読書会の良いところは、皆さんか解説してくださって本の醍醐味を教えてくださいさるのだ。

三輪の存在だ。

人形であるゆえに何年も生きている。それにしても、今のドラマに例えるならば、現代版にリメイクしなければ現代に人には身近に感じられないところがある。

これからも色んな人の感想や理解に頼って読書会に感謝していきたい。

◆【 T 】

道頓堀には、歌舞伎・浄瑠璃に限らず様々な芸事がある。お互い参考にしたり、刺激し合ったり、高め合ったりし、切磋琢磨しながら作品は作り上げられるが、それらの作品は、一つ一つ別な独立したものではなく、影響し合い、時には内容を盗んだり盗まれたりして複雑に絡み合いながら作られたものである。

作品だけに限らずありとあらゆるもの、人から物から、過去から現在から、あの世からこの世からすべてのものが渾然一体となって、ぐちゃぐちゃまじり合って渦になり、その中から作品が生まれ役者が生まれる。

その渦の中で生きている半二や正三たちは、時にはその渦に巻き込まれ翻弄され失意のどん底に落ちたり、時には自らの力で渦を巻き起こし大きな成功を取めたりもした。

道頓堀の熱気のコもった渦、その中で半二の苦しみや喜び。半二自身がこの渦の一部分で、この渦の中でしか生きられないんだろうと思う。

知らない世界のことだったが、とても面白かった。一度浄瑠璃「妹背山女庭訓魂結び」を鑑賞したい。

◆【 N2 】

妹背山婦女庭訓の話はいつの頃からか知っていたのだが、あの娘がお三輪という名前だったのだと作品を読んで改めて知り、この作品で近松半二についてその一生を初めて知った。のっけから生き生きとした会話で始まり、全編テンポの良い関西弁で書かれているせいか、浮き浮きと楽しく渦に巻き込まれながら読み終えることが出来た。

「近松門左衛門亡き後、半年かそこいらでひょいっとこの世へやって来て、成章と名付けられた」という書き方からもうユーモア溢れる作品だと察することが出来る。儒学者の父、以貫に連れられて竹本座へ行ったところから半二の運命は決まっていたのだろう。半二より五歳年下の幼なじみの正三が作った舞台の大道具や仕掛けに驚き、正三の作家としての成功にも嫉妬するどころか「天晴れやなあ、さすがやなあ」と喜ぶ感覚、しかし「一矢報いたるわ」の気持ち。有隣軒で十分学ばせてもらい、文三郎にしごかれ、金銭の心配をしながらも浄瑠璃の台本書きに没頭できたのは、妻や娘、お末、作中のお三輪など女性陣の助けがあったからだろう。その助け人達に巡り会えたのもやはり半二の持って生まれた明るい気性によるころが多かったのだと思う。

道頓堀、芝居小屋界限の賑わい、才能溢れた作家達、人形遣い、太夫、音曲、後見、人と交わって出来る渦、虚実の渦、竹本座と豊竹座、浄瑠璃と歌舞伎、自分が書いたものか書かされたものか、作中にも実生活にも至る所に渦が巻き起こり賑やかに生き生きとした有様が読み取れる。

最後の三千世界の章でお三輪が語るころが面白かった。人の命は尽きても、浄瑠璃人形は世紀を超えて生き続ける。そしてお三輪こそ半二の言う浄瑠璃そのもの。お三輪に女庭訓に縛られずに、自由に自身の気持ちのままに行動して良いのだと語らせている。半二と正三

の料理茶屋での話も面白い。お三輪も高砂屋平左衛門もどこからともなく現れて狂言作者のそばに居座る。そしてこの世で生きていくために、この世と狂言の世界との渦の中へと作者を巻き込んで行ってしまふ。

この本の書き方が半二の一生を舞台上で演じているようで、幕開きは会話で始まり柝の音で幕を閉じている。

半二の手元にあった近松門左衛門の形見と言われる硯を一目見てみたい。

この硯から後世に残る沢山の作品が拵えられたと思うとただの石の塊とは思えない。

◆【 K子 】

第161回直木賞受賞作品です。近松半二という実在の文楽(人形浄瑠璃)の作家の話です。伝統芸能の文楽にスポットを当てた作品です。渦という題名にもあります様に「無限」のものの中に読者を引き摺り込んでゆきます。テンポのいい大阪弁・江戸時代の大阪道頓堀の賑わいの様子。半二と言う浄瑠璃に魂ごともっていかれたような男の生きざま。彼をとり巻く人々(悪人はいないのです)長編なのですが時間も忘れて半二の世界(夢と現実・狂気と正気の狭間)に浸るのも有りかもしれません。

深堀りして人形浄瑠璃に興味を持ち、タイトルにもあります様に演目の外題「妹背山婦女庭訓」と言う作品が核になって登場人物の「三輪」と言う主人公が「魂結び」に繋がってくるのではないのでしょうか。文楽開眼の手引になるかも……。

◆【 MS 】 備忘録として

初めて人形浄瑠璃を鑑賞したのは20年程前、徳島で。操り人形だと解かっている、人形遣い・義太夫・三味線が三位一体となった雰囲気の中、私は『傾城阿波の鳴門』の中に居た。作者は近松半二ほか4名。

今月の課題本は、幼い頃から人形浄瑠璃に魅せられた、その近松半二の物語。大島真寿美の筆は、江戸時代の大阪道頓堀界限、歌舞伎よりも上をいく物語をと苦悩する半二の姿にも悲壮感を漂わせない。私は作品世界に吸い込まれる。芸に魅せられる恐ろしさとその奥深さが、半二だけでなく、失意の中で亡くなった吉田文三郎師匠や、酒に殺された竹田治蔵などにも見受けられ、大島真寿美は人間の深淵を見せつける。読み進めていくうちに、p202「この世もあの世も渾然となった渦の中で、この人の世の凄まじさを詞章にしていく」という言葉が、これでもかと胸を締め付け、鳥肌を立てさせる。

近松門左衛門が名声を手にした頃から、浄瑠璃にたずさわった人達の情念や執念、怨念などの魔物を引き連れ、江戸、大阪、京などの境なく渦の中に吸い込み、半二を通して新しい浄瑠璃の魅力を新しい世界に生み出させる。だからこそ、浄瑠璃を見た私達は時空を超えて物語の深淵に魂を抜かれる。「虚にして虚にあらず、実にして実にあらず、この間に慰みがあるものなり」という言葉が、作品全体に染みわたり、読み手に心地よささえ与えてくれる。

読書会で、『妹背山婦女庭訓』に登場するお三輪の存在とその生き様が話題になった。終了後、図書館に行き会員の方が教えてくれた『妹背山婦女庭訓』(橋本治/文)を借りた。一藤原鎌足の息子淡海は、三輪の里で烏帽子折(えぼしおり)求馬(もとめ)に身をやつして機をうかがううち、杉酒屋の娘お三輪と入鹿の妹橘姫(たちばなひめ)に恋い慕われる。淡海は入鹿の妹橘姫の裾に苧環の白い糸を、お三輪は淡海の裾に苧環の赤い糸をつけ、後を追って三笠山の御殿へたどり着く。嫉妬に逆上したお三輪は、鎌足の使者として御殿にきていた漁師鱧七(実は金輪五郎)に刺される。入鹿退治に必要な「疑着の相」ある女の生き血入用のためと知ったお三輪は、恋人淡海に役立つことを喜んで死んで逝く。鹿笛によって入鹿は魔力を失い、鎌足たちに征伐される。一

ううむ。お三輪は刺され息絶えるまで、何を想っただろうか？

江戸時代に生きたお三輪。女の愠気は好いた淡海を追いかけて御殿にまで忍び込む。誰かに諷められたら「それがどうしたの？好いた男を追いかけて、御殿に乗り込んだだけじゃない」と言ったに違いない。世間は、婦女庭訓の名で、男衆に都合のいい女を創り上げ、小さな世界に閉じ込めようとした。ところが、お三輪は縛りつける世間をものともせず、所詮、男の身勝手じゃないとあざ笑う。だがお三輪は、好いた淡海と一緒に死ぬのでもない、怨んで怨霊になるわけでもない、男を呪うわけでもない、けったいな理不尽な死に方なのだ。雛鳥のように久我之介と相思相愛で、ロミオとジュリエットのような家の確執で、この世で結ばれないのなら、あの世で結ばれるために一緒に死ぬことは、何となく共感できる。しかしお三輪は、好いた淡海本人ならまだしも、彼の父鎌足の部下金輪五郎に刺されたのである。政敵蘇我入鹿を成敗するという大義の為に。自分の死(命)が、好いた男の本懐を遂げる為に役に立ったと単純に喜べるだろうか。結局は男衆の都合の良いように物語として美化されただけではないか。理不尽に殺され、怒りや恨みや悔しさが先に立たないのか……。

そうか、お三輪は息絶えるまでに、何もかもを一即多にしたのか！女が男を“好く”とは、嫉妬も、怒りも恨みも悔しさも、好きの渦の中に吸い込ませ、一即多多即一にして、ここまで凄まじく狂おしく愛おしく「死をも喜ぶ」という感情を噴き出させるのか。還暦を過ぎて“好く”の深淵を知る。果てさて、私はここまで人を好いたことがあっただろうか？

いよっ、お三輪さん、かっこいい！これからも三千世界に生き続けてね！

◆【 MM 】

読書会の当日、率直な感想を述べた。「大坂弁が調子よくすらすらと読み進められたが終わりのあたりのお三輪が出てくるのが鼻についてくる。お三輪にしゃべらせすぎて興ざめだ」と。半二が妹背山婦女庭訓を書くときに降りてきたお三輪。お三輪が語る場所は字体が変えてあり、最初は「ふむふむ」と読んでいたがそこに割かれる度合いが増えるにつれげんなりした。もっと話の世界に入り込みたいのに、このやり方はどうなのか…。

私のこの感想を先生が拾って下さり「お三輪をどうとらえているのか」「お三輪の位置づけは」と問われたがその時の私にとってのお三輪は妹背山婦女庭訓に登場する人物の一人でし

かななかった。だからその人がなぜこんなに話すのか、説明するのか違和感を感じるなあ、くらいにしか思っていなかったのだ。そこが今月の大きなずれだった。

お三輪の出現、表現方法を私のように違和感と取らなかった人との違いは何か。そもそもの『妹背山婦女庭訓』を知っているかどうかである。

まず『妹背山婦女庭訓』を読んでみた。絵本で借りてみた。歌舞伎絵巻というシリーズの『妹背山婦女庭訓』(ポプラ社、2012)。この歌舞伎絵巻の他のシリーズは図書館にもあるのは知っていたが岡田嘉夫の絵がとても個性的で今まで手にとって読み込むことはなかった。今回読んでみて、この絵が話の雰囲気やうまく表しているな！と思った。印象的なシーンはページが倍に開くようになってとても綺麗だったし妖しさも出ていてこの画家だからできたことではないかと思えるほど良かった。文は橋本治、『桃尻娘』を書いた人である。長い話をコンパクトにまとめてあった。さすがだなあと思ったのでこのシリーズは他の4冊も読み進めることにする。

絵本を読んだ後、浄瑠璃って実際どんなものなのと思って動画も見てみた。便利な時代に感謝である。浄瑠璃の入門書も借りてばらばらとめくってはいたが、動画で見るとダイレクトに伝わって感激した。人形を3人で操作する。操作する人の顔は見えたままなのか…と思っていたのは動画を見る前で、見始めると人形にしか目がいかなかった。人形が人間にしか見えない。3人であの動きを出せるのが驚きだ。実際に観たらどんなに感動するだろうと思った。

絵本と動画を見たあと、お三輪が出てくる婦女庭訓の章から最後までもう一度読んでみた。こんなに違った景色が見えるのか。するすると私の中に入ってきた。話もお三輪も。半次も正三もみんな生き生きと目に見えるようだった。あの鼻についてお三輪の語りのくんだりだって、なにも違和感を感じなかった。何でしょうこのマジック。『妹背山婦女庭訓』を読んだり浄瑠璃の動画を見ただけなのに。いきなり世界が広がった。

お三輪を使った語りはどうして用いられたのか、私なりに考えた。『妹背山婦女庭訓』の中では想っていた淡海の役に立てるとはいえ、命を捧げたお三輪。しかも恪気、激しく嫉妬深い感情、これは人が持つてはいるが表に出ることはないことが多いかもしれない、しかしこれを前面に出して(というイメージで)死んでいったお三輪。そのお三輪を使って語らせたのは死んだ後のお三輪は「劇中では亡くなったけどお三輪は生きているんだ」と感じさせたかったのではないか。お末も許婚と結婚できなかつたけれども落としどころを見つけて与えられたところで咲いていた、輝いていた。お三輪も命こそ取られはしたが、その後も現代まで300年を越える長い間に何度も上演されて人々から「ああ、お三輪」と心に存在を残し、生きている。「おかげさんで、私、まだまだちよくちよくお声がかかりますのやで。ふふ」というお三輪の声が本当に聞こえてくるようだ。

作者の大島真寿美はインタビューで『妹背山婦女庭訓』にとっても魅かれて書いたと言っていた。その好きな気持ちは存分に伝わってきた。しかし、知らない人が読んだら冒頭の私のような感想になることもあるかもしれない。これはもったいない。今回は読書会に参加することで全然違う世界を見ることができた。この広がりを持てるかどうかが大切だ。みんなと集まっていろんな考え方に触れることができありがたい。